



TITLE:

# タイ・ビルマ現代政治史研究( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

矢野, 暢

---

CITATION:

矢野, 暢. タイ・ビルマ現代政治史研究. 京都大学, 1970, 法学博士

ISSUE DATE:

1970-07-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/213423>

RIGHT:

【 12 】

氏 名	矢 野 暢 や の とおる
学 位 の 種 類	法 学 博 士
学 位 記 番 号	論 法 博 第 25 号
学位授与の日付	昭 和 45 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	タイ・ビルマ現代政治史研究

論文調査委員 (主 査)  
教 授 福島徳寿郎 教 授 猪木正道 教 授 野口名隆

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、タイ国およびビルマ連邦の現代政治史の分析を通じて、発展途上国における政治的不安定の問題の理論的解明を企てたもので、三部と別冊付録よりなる。

第一部「タイ国の現代政治」は二篇よりなり、第一篇「タイ国現代政治の開幕——1932年立憲クーデターの政治過程——」では、タイ国に立憲君主制をもたらした1932年革命の原因究明と、その歴史的意義の解明が試みられている。革命の遠因は、絶対王制下での上からの近代化の不徹底に、直接の原因は、ラーマ六、七世の統治能力の欠如に求められることを明らかにするとともに、32年革命は、一応の成功をおさめたものの、革命を担った人民党の権力感覚の欠如から、またたくまに軍部寡頭制の成立を招く結果になり、タイ国に民主政治を定着させる有効な契機とはなりえなかった経緯を詳細に論証する。

第二篇「タイ国現代政治の分析——権力法則・代表原理および政治的不安定を主題に——」では、32年革命以降のタイ国政治を一貫する特質が、エリートの循環、政治的統合、権力の正統化等の問題との関連において探究されている。32年革命以降の顕著な特徴として、政治的不安定が慢性化した事実を指摘するとともに、その原因は、少なくとも二つの政治的な課題——権力授受のルール確立、および近代的代表原理の選択——が未解決のままに残されたことにある所以を詳細に論証する。

第二部「ビルマの現代政治」も二篇よりなる。第一篇「ビルマ現代政治の背景——ビルマ連邦独立の政治過程——」は、ビルマの独立運動を植民地独立運動の一つの典型としてとらえ、1886年に英国の植民地となったビルマが、1948年に主権国家としての独立を遂げるにいたるまでの過程を、豊富な資料を駆使して詳細に分析している。

第二篇「ビルマ現代政治の動態——1958年における軍部・選挙管理内閣の成立を主題に——」では、ビルマ連邦が、独立後民主主義を選択しながら慢性的に政情不安を続けたあと、1958年、にわかに軍部政権を成立せしめた過程に着目して、ビルマにおける政治的不安定の問題の解明が試みられている。独立運動が必ずしも政治権力の正統化の基礎をつくりえないこと、また独立運動の過程で形成される権力構造が必

ずしも民主主義制度と適合しえないことを明らかにするとともに、そこに生ずる政治的不安定状況に対応しうるものは、ビルマにおいては、軍部だけしかなかったことを論証する。

第三部は、タイ、ビルマ両国の現代政治史年表であり、タイ国については、1910年ラーマ六世の即位以降1964年までが、ビルマ連邦については、植民地化した1886年以降1963年までが扱われている。

別冊付録「タイ・ビルマ現代政治史研究史料集纂」には、両国の現代政治史研究に不可欠な基本的史料が、原文と訳文でタイ関係五篇、ビルマ関係四篇、計九篇収録されている。

### 論文審査の結果の要旨

発展途上国の政治の研究は、近年、政治研究の分野における主要な問題領域の一つとして広く注目されるようになり、発表される研究成果も年を追って増加してきつつある。しかし、これまでの研究の多くは理論的関心を欠いた単なる「事実主義」か、あるいは実証をとまなわない理論過剰のアプローチか、そのいずれかに分れる傾向をみせている。この論文は、明確な理論的関心と厳密な概念構成に支えられながら、同時にタイ・ビルマの政治過程を実証的に分析し、歴史分析と理論形成の総合を旨としつつ、政治史研究に新しい方向を拓こうとしている点に、その基本的特徴とすぐれた価値が認められる。

発展途上国の政治の研究においては、従来、いわゆる「近代化」ないし「発展」の問題に主たる理論的関心が向けられており、政治的不安定の問題を主題とした研究はきわめて限られていた。

タイ・ビルマ両国における政治的不安定の軌道を克明に分析したこの論文は、これまで看過されていた新しい視点を提起したものであり、この点でもまた、発展途上国の政治の研究に寄与するところが少なくない。

タイ・ビルマの現代政治史研究は、わが国ではほとんど未開拓の分野であり、邦語文献は僅少であるというのが実情である。このような現状のもとにあって、豊富な原史料を駆使してなされたこの論文は、歴史研究という観点からみても、わが国のタイ・ビルマ現代政治史研究の水準を高めたものであり、本論文の別冊付録史料集纂とともに、その斯学への貢献は多大である。

よって、本論文は法学博士の学位論文として価値あるものと認める。